



献上枇杷の歴史

房州特産である枇杷の天皇、皇后両陛下への献上は、明治42年6月20日に富浦村南無谷の木村謙吉氏によって始められた。当時の枇杷栽培は富浦村が中心であり、中でも南無谷地区はその礎で、栽培面積10町歩を有し、京浜地区の及びその他の市場において名声を博していた。明治31～32年頃より従来からの在来品種の実生栽培から品種改良を手掛け、その後10年余りを経て、42年によく初期の目的とするものを得て、地区内の優秀な枇杷園を選定し、栽培その他の特別の管理を施し、収穫、選果は厳重な選果式を経て、天皇、皇后両陛下に第1回の献上がなされた。その後も引き続いて献上が続けられ、戦争中に一時中断されたもの今日まで引き継がれている。

近年では、出荷最盛期の6月上旬頃、房州枇杷組合連合会傘下の8組合から出品された枇杷の選果式を行い、慎重な審査の下、献上品を決定している。

選果式の翌日、枇杷組合会長ほか関係者により天皇陛下、皇后陛下、皇太子殿下、皇太子妃殿下への献上を行っている。玉数は、24玉（4Lクラス）の立派なものであり、桐箱に収められる。

また、過去には恒例の枇杷献上の他、大正7年6月11日に皇太子殿下（昭和天皇）の館山湾御仮船に際しても、献上するとともに、同年6月25日には英国コンノート皇太子殿下への栄光にも浴している。

献上枇杷は、皇室に初夏の味をご賞味いただくとともに、房州枇杷の名声を高める行事として定着している。枇杷生産者にとっては、誇りであり、生産意欲を掻き立てるとともに高品質な商品を消費者へ届け続けることへもつながっている。



▲昭和16年6月10日に撮影された献上びわの様子



枇杷栽培の歴史

(1) 千葉県での栽培の始まり・経緯

①明治以前

枇杷が果樹としての地位を確立したのはごく近代に入ってからだが、房州に根を下ろしたのは、相当に古い時代であったことが想像できる。

現在、房州にある在来枇杷の分布を見ると、鴨川市から東海岸の和田、千倉、白浜に及ぶ地域と、東京湾岸の西岬から保田に至る海岸地帯、内陸では三芳、平群と房州全域に分布している。

昔からある在来枇杷は自家用として消費され、大正末期頃までは村祭りなどで子供相手に売られていた。江戸（東京）市場に出荷し始めたのは、宝暦年間（1751年）頃であり、天明4年（1784年）の仕切書によってうかがい知ることができる。これは、汐入村（現南房総市富浦町豊岡地区汐入）の山田屋、南無谷村の太郎右衛門、与五左右衛門等の果物仲買人により、江戸の神田須田町三河屋岩蔵に向け出荷し、同店からの売り上げ仕切り書によって明らかとなっている。当時の栽培面積は極わずかで、果物を輸送する船がなく房州から江戸への押送船（“おしおくり”という魚類輸送専用船）を借りて海上10時間をかけて江戸まで送っていた。

当時、南無谷村鯨谷の和泉澤惣左右衛門所有の枇杷林1反歩弱は、村内の最も老樹でその年々の枇杷生産額は、和泉澤老翁の日々嗜む酒料に当てて尚あまりあったというから相当の収益を上げていたと思われる。

このように収益性の高い枇杷も、枇杷の移植栽培に従事する者は短命となるという古来よりの言い伝えにより、南無谷全体で僅かな面積であった。天保、弘化の頃になると、迷信妄説も打破され、僧侶や里正（村の長）など物事を理解する人々によって奨励され、2町歩余りの枇杷林となった。

一方、館山の城山の枇杷は、安永年間（1772～1781年）に里見家の家臣の出の杉田孫兵衛、岩崎与次右衛門の両名によって初めて植栽されたとされている。



②明治

明治初期は、主として仲買人兼栽培者の手によって輸送されていたが、明治14～15年になると、嗜好の程度が高まり、市場価格も上昇し、1樽1円以上の高値となったため、仲買人等は栽培の推奨に努めた。この結果、移植栽培者が続出するとともに、仲買人の手を经ず栽培者が自ら輸送するようになった。20年頃には、南無谷全体で20町歩に達し、30年頃には40町歩と倍加した。このため、従来の輸送方法では、時間がかかりすぎることから、33年に「南無谷枇杷組合」を組織し、組合事業として収穫高において曳舟に要する汽船を借り入れ、迅速且つ確実な共同輸送の方法をとり、新鮮な枇杷を市場に供給するようになった。また、品質向上を図るため、病虫害防除や肥料の共同購入、品評会等に取り組んだ。さらに、将来生産過剰となった場合に備え、枇杷酒醸造を研究し、36年に「日本枇杷酒株式会社」が創出された。

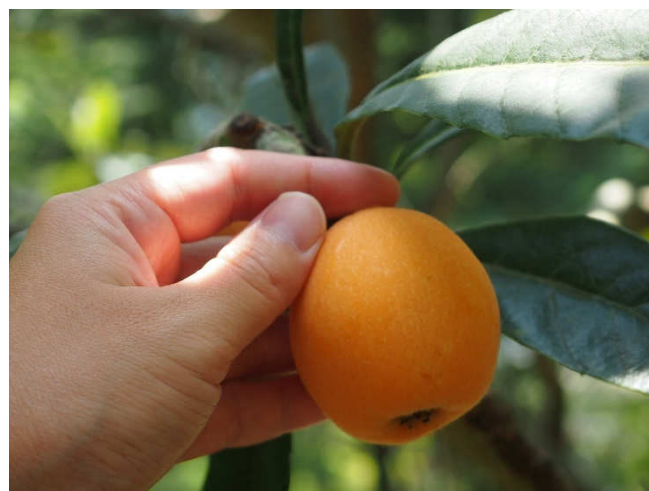
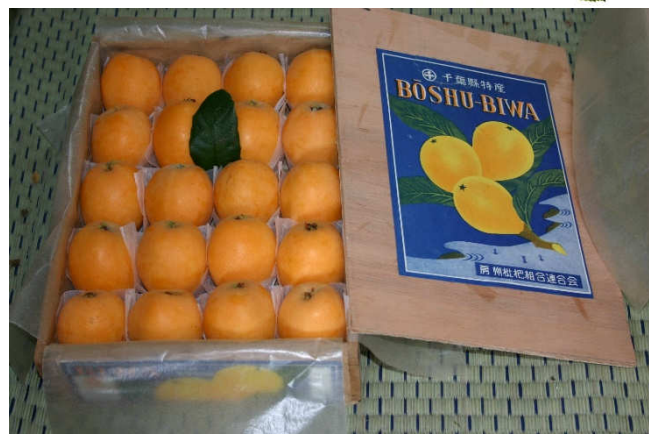
千葉の枇杷



③大正

大正に入って、その栽培熱はますます盛んとなり、栽培適地が拡大され、南無谷枇杷は富浦の枇杷へ、さらには房州枇杷へと展開していった。大正元年末の富浦枇杷の栽培面積は、71町歩、樹数は55,000本に至っている。大正4年になると、除雪風雨による障害を予防し、品質を向上させるため、果実に袋掛けをするようになった。

このようにして、富浦の枇杷が千葉県の重要物産の価値を持つことになり、県でも奨励に乗り出し、農業試験場において他県よりも優良品種の接梢や苗木を収集して試験ほ場を設け、積極的に援助を始めた。8年には、東京青果物市場組合連合会より容器改善と市場手数料の改正に対する申し込みがあり、これが契機となり、化粧箱が考案され、手数料も売上額の10%と決定した。



③昭和前期

昭和に入って、容器改造問題の解決により従来の樽詰荷作りから箱詰荷作りが変わり、昭和2年には化粧箱が試用される等、出荷が便利になり売れ行きも好成績を収めるようになった。5年から本格的に化粧箱が試用され、1果ごとに京花紙で包装し、フタ板、ツマ板等に色刷レットを貼付した荷作りとなり、ますます商品としての体裁価値を高めた。翌6年には「房州枇杷組合」が発足し、専任技術員を常置し、栽培・販売・統制等に関する業務を推進した。これにより、肥料の共同購入、土壌調査等を実施するとともに販路の拡大も図り、北海道函館との取引も行われ、8年には40万箱を出荷するまでになった。

しかし、太平洋戦争の激化に伴い、資材・労力不足等から病害虫の被害、管理の不十分も手伝い、枇杷園は著しく荒廃してしまった。

④昭和後期

終戦後の23年頃になると、人々は虚脱感から抜け出し、徐々に復員、引き揚げ者も安定してくると、枇杷山復興の機運が起こり始め青年層を中心に、各枇杷組合の立ち直りを見せ始めた。

28年頃になると、「房州枇杷組合連合会」が発足し、34年には枇杷老朽化対策が練られ、青年たちによって「枇杷研究会」も結成されるなど積極的に枇杷作りに取り組んでいった。56年からは天候不順による寒害防止と生産の安定的拡大を目指しハウス栽培が始まった。60年には「富浦農協施設びわ研究部」が設立され、同年ハウス枇杷が初出荷となった。

⑤平成

現在、房州枇杷組合連合会は、8つの組合により構成されている。栽培農家の高齢化、後継者不足が続いており、生産現場は厳しい環境にある。しかし、大都市に近いといった立地条件を生かし、販売形態も市場出荷の他に、直売、観光もぎ取り体験等、多様化してきた。

16年には、世界初の種子なし枇杷「希房（きぼう）」が出願公表され、18年に品種登録、20年から販売が開始された。また、19年3月に「房州びわ」が地域ブランド商標として特許庁から承認され、商品価値を一段と高めることとなった。